

十数万年の時を経てようやく日本列島にたどり着く。

## 第二節 日本の旧石器時代

### 研究の歩み

日本で旧石器時代の存在が認められるのは戦後のことである。そもそも近代日本考古学の成立も他の学問に比べ決して古いものではなく、明治十年（一八七七）エドワード・S・モースによる大森貝塚（東京）の発掘が嚆矢である。しかし、その後の日本の歴史観は容易に歴史学としての考古学の自由な発展を許さず、特に皇国史観による歴史の歪曲は皇紀元年（前六六〇年）以前の人類の存在に否定的で、その研究の自由が保障されるのは戦後のことであった。

昭和二十四年（一九四九）、群馬県岩宿遺跡が相沢忠洋によって発見され、日本列島に縄文時代より古い石器を主体とする文化の存在が明らかになった。それまでの日本の歴史では、縄文土器を含む地層より下位、つまり赤土（関東ローム層）に人類の生活の痕跡は存在しないというのが定説化しており、当時、行商をしながら熱心に旧石器を追い求めていた相沢が赤土の中から発見した石器は日本の考古学会に衝撃を与え、その後一気に旧石器時代研究が加速することになる。

一九五〇年には早くも杉原壮介、芹沢長介による日本の旧石器時代編年が発表され、その方向性を示すとともにその後の研

究の契機となつていった。事実、日本各地で旧石器時代の遺跡の発見が相次ぎ、九州においても以前からその存在が予測されていた佐賀県上場台地などで調査が開始される。そして、列島のあらゆるところから旧石器時代の遺跡が発見されるに従い、研究の方向は様々な分野からのアプローチがなされるようになり、その実態は徐々に解明されつつある。その方法論として石の形を調べるもの（形式論）、石器の出土状態から生活の様子を探ろうとするもの（分布論）、石器を作る方法の分析（技術論）、また、それらをふまえて社会構造に迫ろうとするもの（集団論）、地層の分析による年代の決定（火山灰の研究）、更には古生物学や古環境学による環境の復元、地理学や古地磁気学による地形の復元、そして遺伝子学によるDNA分析は日本人のルーツの解明に迫ろうとしている。

しかし、その全ての解明にはまだまだ多くの時間が必要で、日々の発見はその長い道のりを暗示している。つまりたかだか五〇年の研究で解明されるほど、我々の祖先の歴史は単純ではないということである。

### 前期旧石器時代論争

さて、旧石器時代が人類最古の文化である以上、最古の日本人はいつ日本列島に登場したかという答えは誰もが知りたいところである。

昭和六年（一九三一）直良信夫によつて兵庫県明石の海岸で発見された人骨は、その特徴からホモ・エレクトゥス（原人）

とされたが、その後の研究により否定されている。また、前述の港川人もホモ・サピエンスの段階とされ、人骨から最古の日本人の姿は浮かんでこない。一方、一九六〇年代には大分県を舞台として早水台遺跡、丹生遺跡の発掘を契機に前期旧石器時代論争が行われたが、これも決定的な石器が発見されず決め手を欠いた。そうした中、近年東北地方を中心に一〇万年を超える地層からの石器発見が相次いで報告され、一時は六〇万年前という北京原人の時代に並ぶ遺跡まで登場した。しかしその後、これらの全ては一介の考古学愛好家による捏造ねつぞうという事実が露見し、戦後日本考古学の研究史に大きな汚点を残してしまった。歴史の改ざんによる悲劇は過去の歴史が示すとおりで、ましてやその調査に係わる人間が自ら手を下すのは言語道断であり、大きな戒めとなった。

こうしてみていくと、現段階で日本列島に確実に前期旧石器時代と呼べる遺跡を見出すことは出来ないが、少なくとも四五万年前までの人類の足跡を追うことは出来る。また、長野県野尻湖立が鼻遺跡ではナウマン象やオオツノシカの骨とともに石器の発見があり、こうした地道な調査の成果として今後、日本列島からも前期旧石器時代の遺跡が発見されることを期待したい。

### 後期旧石器時代

日本列島において遺跡の数が爆発的に増加するのがこの後期旧石器時代である。それ

までの断片的な情報量が嘘のように各地でこの時期の遺跡が発見されるようになる。とはいってもその絶対数は後の縄文、弥生、古墳の各時代とは比べようもなく、今後の調査に負うところが大きいのも事実である。その原因の一つは人口の少なさで、記録のない時代、その数は推計によるしかないが、発見された遺跡の数や縄文時代との比較などから、全体で約一万人程度であったとする説もある。現在の日本の人口が一億二千七百万人余であるから、その少なさが実感されよう。それにしても、縄文時代（新石器時代）が始まるまでの約二万年余、私たちの祖先はこの地で様々な変化を経験しながら、確かな生活を始めたのである。

その生活の様子を解明する手がかりを求めて、古くから研究者の注目を集めているのが関東地方である。そもそも旧石器時代の遺跡は関東地方でいう「赤土」の中に含まれるもので、地質学で「関東ローム層」と呼ばれるものである。その生成要因は火山の噴火であり、現在見るような桜島や阿蘇山の噴火で降り注ぐ火山灰（降下テフラ）が降り積もって土壌化したものである。いうまでもなく関東地方は富士山や浅間山といった日本を代表する火山の密集地帯であり、大量の火山灰が堆積している。縄文時代より前のこの赤土の中に人類の生活の痕跡、すなわち石器を探すことから日本の旧石器文化の研究ははじまったわけである。

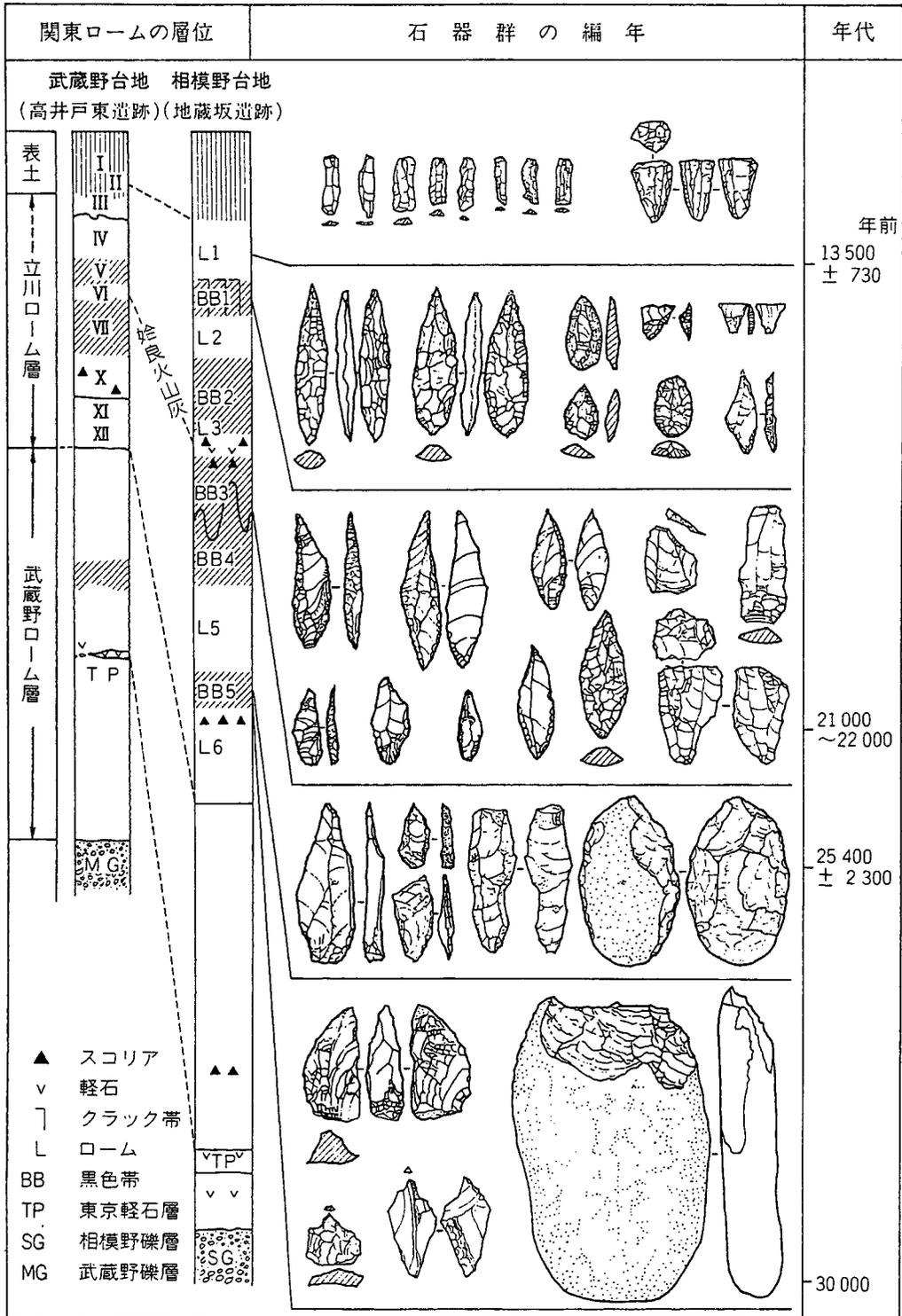


図2-3 日本の旧石器時代編年(関東編年)(戸沢 1995「古代文明の形成」)

ところで、火山の噴出物は全てが同じ成分によって形成されているのではなく、様々な成因によって微妙に異なる「顔」を見せる。例えば、阿蘇山に続く道路を走っていると、工事によって削られた切通と呼ばれる土壌面を見ることが出来る。そこを注意してみると、まるでサンドイッチのように赤や黒、オレンジといった地層が縞模様を構成しているのがわかる。これらは火山の噴火時期、規模によってその噴出物の内容が違いうために生じるもので、この火山灰の成分や年代を分析することによって、そこに含まれる石器に科学的な資料価値を与えることができるのである。現在知りうる最も代表的な火山灰は始良丹沢テフラ（AT）で、約二万四〇〇〇年前に鹿児島島の始良カルデラ（現在の錦江湾）の大爆発によってもたらされたものである。普通火山灰の降り積もる範囲は一定の地域に限定され、事実阿蘇の火山灰は福岡には降らない。しかし、始良カルデラの噴火は成層圏にまで達するほど大規模で、遠く東北地方でもその存在が確認されている。こうした広範囲にしかも年代の分かる火山灰は旧石器時代の調査では貴重で、この火山灰層をキープ層として石器の年代を探ることが出来る。

一方、限られた地域に火山灰の堆積が発達し、かつ、多くの遺跡が集中しているのが前述の関東地方で、地質学では大きく四時期に区分されている。それによれば関東南部では古いほうから多摩ローム層（約四〇〇〜二三万年前）、下末吉ローム層（約

一三〜六万年前）、武蔵野ローム層（約六〜三万年前）、立川ローム層（約三〜一万年前）とされる。これらの地層はかなりの厚さで堆積しており、武蔵野、立川ローム層だけで五〜八メートル（武蔵野台地）にも及ぶ。関東地方ではこのローム層、特に立川ローム層の中に実に豊富な石器群が残されており、日本の後期旧石器文化の石器研究は関東地方の調査成果を軸に組み立てられている。その変遷は図2-3に示すとおりで、ナイフ形石器の発達が十分でない北海道を除くと、全国的にはほぼこうした傾向が見られる。

いずれにせよ日本の後期旧石器時代は、こうした豊富な石器に代表されており、これらの資料をもとに当時の社会構造や生活の様子などを解明する研究が、様々な分野との連携で進められている。

### 日本列島のすがた

後期旧石器時代、地質学ではこの時代を新生代の第四紀、更新世と呼んでいるが、更新世から完新世へと移る約一万年前にはほぼ現在の日本列島の形が形成されていた。その過程で急激に遺跡数の増加する約二万年前（ヴェルム氷期）の日本列島はどのような自然環境を有していたのであるうか。最終氷期であるヴェルム氷期は地球を襲った四回の氷河期の中でも最も厳しいものとされ、その最寒期とされる約二万年前には、現在の南極大陸に見られるような大陸氷河（氷床）はイングランドを含む北欧、東欧の全

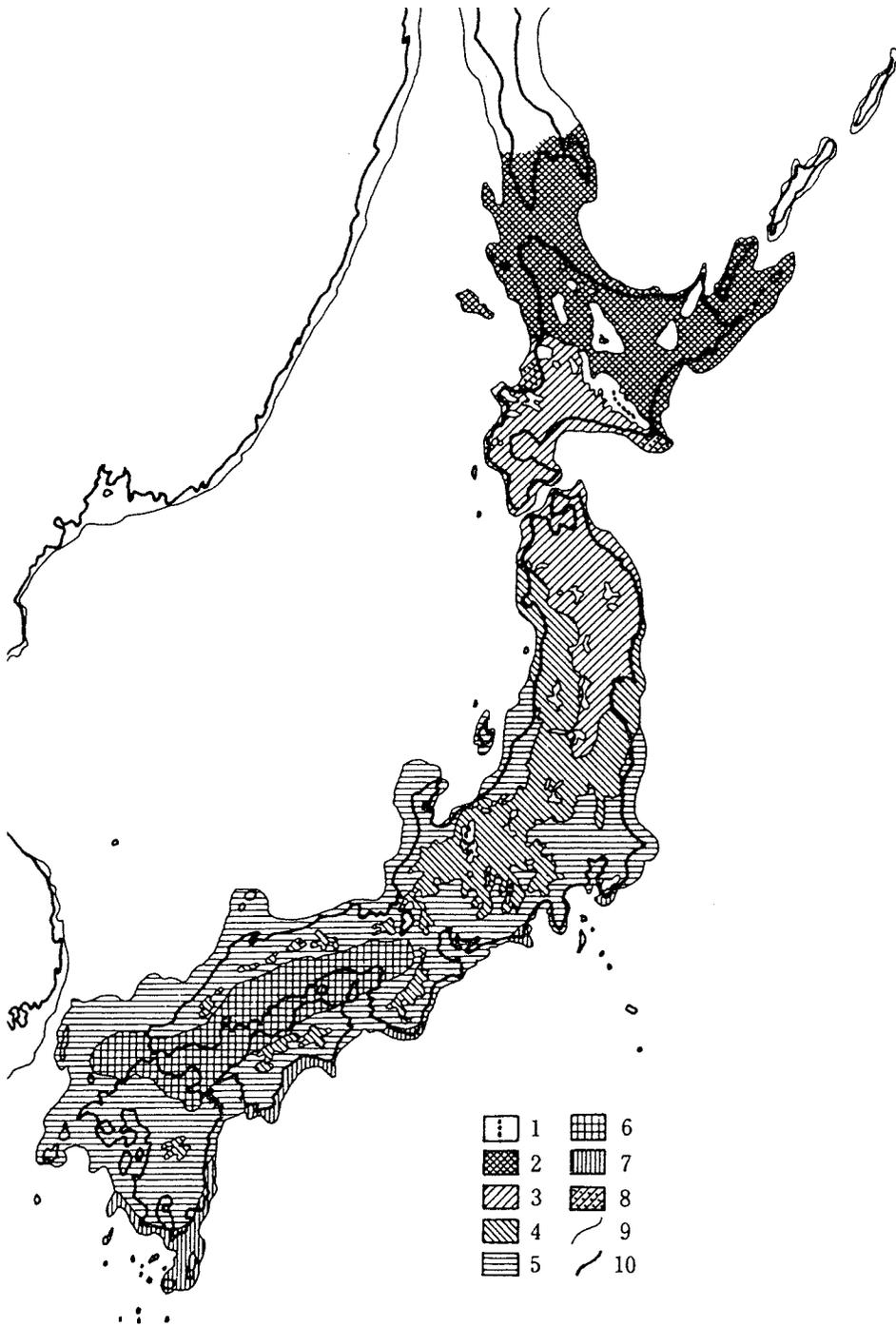
域、シベリアの大部分と中国北部、北アメリカの北部など、地球全体のほぼ三分の一を厚さ二〇〇呎以上で覆っていた。本来、地球上の水分は一定量しかなく、その結果全地球的な規模で海水面の降下が起こった。逆に温暖化は海水面上昇を引き起こし、現在問題となっている地球環境の悪化に伴う温暖化現象はまさにこのケースである。

では、具体的にどの程度海面の降下が見られたかという点、最大で一〇〇〜一四〇呎と考えられている。この数値を海底の地形に当てはめてみると、現在でも日本周辺の大陸棚は深海二〇〇呎以下の部分が多く、海岸線に沿ってかなりの部分が陸化したと考えられる。当然、瀬戸内海はほとんど陸化しており、有明海や響灘も同様である。更に、深さ四〇呎の宗谷海峡、一〇呎足らずの間宮海峡は以上に及ばず、一四〇呎の津軽海峡、対馬海峡なども一部陸化した（陸橋）可能性があり、日本列島は北も南も大陸と陸続きか、それに近い状況にあった可能性がある。ただ、対馬海峡が完全に陸化したかについてはそうではないとする説が有力で、最終的に数キロの幅で海峡が残されたと言われる。また、東シナ海の黄河下流域にも広大な平原が出現し、こうした陸化した地域には現河川からの延長でさらに大きな古代大河が存在した。東南アジアのマレー半島、スマトラ島、ジャワ島、ボルネオ島に囲まれた海域にかつて存在したというスンダランドも、同様の海面降下によって形成されたので

ある。

さて、こうした海面の降下によって大陸との地形的な関係が築かれた時期には、今では存在しない大型の哺乳類が日本列島に渡ってきた。マンモス象や毛サイ、オオツノジカ、ナウマン象などで、各地でその化石などが発見されている。その条件は海面の降下だけではなく、シベリアの寒冷化による植生の変化も大きな要因として考えられている。つまり、大型の哺乳類であるマンモスなどが活動するのに適した環境がシベリアの大平原で減少を始め、そのエリアが極東地域に南下することにより北からの大型哺乳類の南下を促したというのである。

その植生の変化はいかなるものであったのか。最終氷期最寒冷期の植物相を概観すると、大まかに三つの植生帯に区分される。すなわち①北海道東北部にグイマツ、ハイマツの疎林と草原 ②中部地方内陸高地までの亜寒帯針葉樹林 ③東北南部から九州までの冷温帯落葉広葉樹林で、列島の北にシベリアを思わせる草原が、その南には針葉樹林と落葉広葉樹の森が存在したことになる。こうした植生はそれぞれに地域に生息する哺乳類の活動を支えたものであり、その後の緩やかな温暖化現象によって次第に変化を遂げた。九州では温帯落葉樹林が広がり始め、更新世の終わりに暖温帯照葉樹林が現れる。その結果、生息する動物にも変化が生じ、約一万六〇〇〇年前にはナウマン象や北方系の大型哺乳類は姿を消し、シカなどを中



- 1：氷河（黒点）および高山の裸地・草地（ハイマツ帯を除く高山帯に相当する地域）  
 2：グイマツ・ハイマツを主とする疎林と草原      3：グイマツを主とする亜寒帯針葉樹林  
 4：グイマツをともなわない亜寒帯針葉樹林（中部地方、および近畿地方では一部カラマツをともなう）  
 5：冷温帯落葉広葉樹林（ブナをともなう）      6：ブナをほとんどともなわない落葉広葉樹林  
 7：暖温帯常緑広葉樹林      8：草原      9：最終氷期寒冷期の海岸線      10：現在の海岸線

図2—4 日本列島における最終氷期・最寒冷期の植生図（中野・五十嵐 1991）

心とした中型の動物相が成立し、西日本ではイノシシの顕在化も推定されている。

近年、こうした環境の変動が歴史を決定づけると強く唱える研究者もいるが、ある意味そうした指摘は的を射ているのかもしれない。事実、アフリカの大地からホモ・サピエンスが世界各地へと拡散をはじめた要因は、環境への適合能力を身につけたことに他ならないし、そうした行動の結果として人類は、様々な環境のもとで独自の文化の形成を行ってきた。そして、ユーラシア大陸の東の端で再び北からの集団と、南からの集団がそれぞれの文化を持ち寄りその後、日本で独自の旧石器文化を發展させたのである。そこには狩猟という生活の糧を求め、遙かなる大地を移動する狩人たちの姿を見ることができるといえる。

### 石器の種類と変遷

旧石器時代の文化を知るうえで最も大切な資料はやはり石器であろう。当時の生業の全てが石器に拠っていたわけではないが、火山列島という日本の地域性の問題もあり、木器や骨角器の遺存がほとんど望めないことや、それらを製作する道具としてその原点は石器であることなどから、石器を基準とした研究は多岐にわたる。

ところで、遺跡から出土するいわゆる石器というのはナイフ形石器などの完成された製品である道具と、それを製作するうえで生じる道具以外のものがあり、製品に比べ後者のほうが圧倒的にその数が多い。製品以外のものとしては石器の素材とな

る剥片（フレイク）、製品に加工する過程（二次加工）で生じる石の屑（碎片・チップ）、石器の素材を作り出す過程（一次加工）でそのもととなる石核などがある。ここでは後期旧石器時代に使われた石器（製品）の種類とその製作技法について概観したい。

#### 約三万年前

最も古い段階で現れる石器に礫器と呼ばれるものがある。これは手に持ちやすいくらいのもので、より原始的な道具とされる。刃として利用したもので、

#### 約二万五〇〇〇～一万三五〇〇年前

次の段階ではナイフ形石器が出現する。大型のものでも一〇センチに満たないこの石器こそが日本の旧石器時代を代表するもので、ヨーロッパでは主要な石器として知られるが、中国大陸や朝鮮半島、シベリアではあまり見られないものである。ナイフ形石器の分布は全国各地で様々な地域的特徴（石材や製作技術など）を有し、基本的な形態として尖端が尖ったもの（杉久保型）、切り出し型（茂呂型）、横に広いもの（国府型）などが見られる。その製作技術としては石刃技法、瀬戸内技法といった製作技術が明らかで、前者は縦長の規格化された素材（剥片）を連続的に作り出すことが出来、後者はサヌカイトと呼ばれる石材の特徴（石の目）を利用して、横長い剥片を作り出す。いずれの技法も石器の素材となる石材から極めて合理的にその材

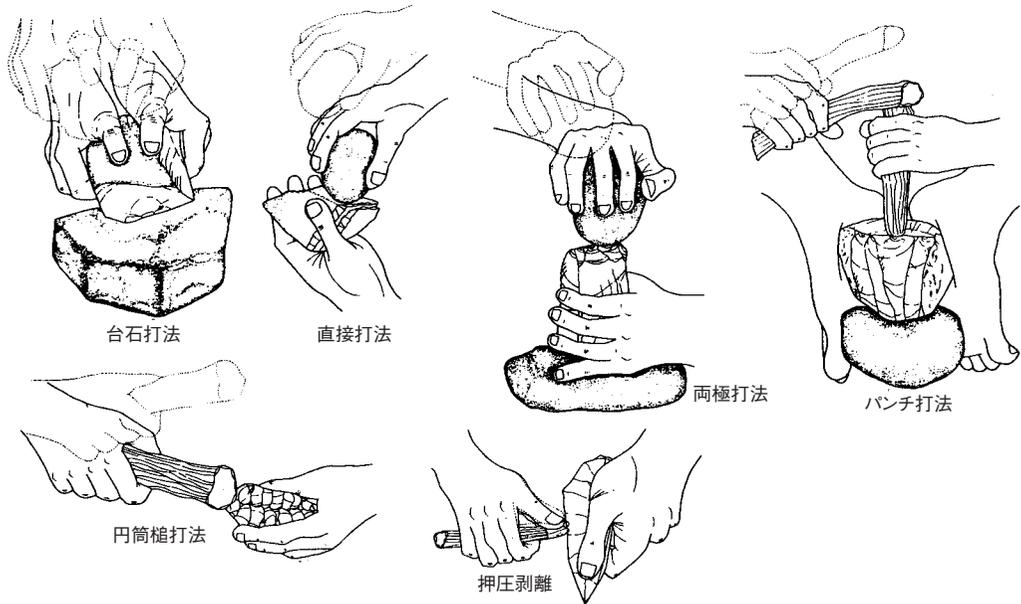


図2—5 石器の作り方と種類（「旧石器考古学辞典」旧石器文化談話会 2000）

料を生み出すもので、生活の糧としての石器製作を革命的に進化させた。ただ、こうした定型化した素材を得る技法が顕在化していたわけではなく、新しい段階になると不定形の剥片から様々なナイフ形石器が製作されるようになる。この他、時期的な変遷の中でナイフ形石器と共に見られるものに剥片尖頭器、角錐状石器（三稜尖頭器）がある。これらは明らかに槍先に装着する刺突具であり、道具としての石器に機能分化が生じたものである。同様に解体具としてスクレイパー、加工具として石錐、彫器なども出現し、ナイフ形石器自体も次第に小型化の傾向を強めていく。こうしたナイフ形石器を主体とする時期、すでに日本列島は大陸との陸橋が消滅しつつあり、大陸と隔絶された島国という環境の中で独自の石器文化を発達させていった。

約一万三五〇〇年前

後期旧石器時代の終末期、新たな石器文化がもたらされる。細石器と呼ばれる石器は、細かな石器を組み合わせて使用するという意味で新たな石器革命をもたらした。そのルーツは中国大陸やシベリアに求めることが出来、製作技法や形式から、北からと南からの伝播ルートが考えられる。細石器の特性は幅数弱、長さ五センチほどのカミソリの刃のような石刃を、シャフトの両側に並べて埋め込む（組み合わせ）ことにより刺突具として使用することである。したがって、破損した刃は容易に取り替

えることができ、また規格が小さいことから少ない材料で多量の素材を得ることが可能となる。更に、小型ゆえに重量がなく携帯に便利で、獲物を追って移動する際に負担にもならないし、限られた石器に適した石材（黒曜石など）の入手が少量で済むなど、極めて利便性が高く省資源化を可能とした石器といふことが出来る。一方で槍先型石器の発達も見られ、石器の出現に象徴される縄文時代草創期まで使用された石器である。

こうした石器の変遷は製作技術の進化とともになされたものであるが、狩猟対象の変化も大きな要因であった。最初に現れる礮器は柄の先に括り付け、ハンマーのように獲物を殴打する程度のもので考えられ、まさに原始的な道具といえる。しかし、ナイフ形石器の段階では刺突具（槍）としての形態を整え、併せて解体具としての機能も有していた。そして、その小型化と槍先型石器の登場は飛び道具としての投槍を想定しうるもので、組合せ道具としての細石器は、更に機能的なメカニズムを与えることとなった。狩猟対象動物の変化とともに狩人たちは、より効率的な技術革新を繰り返していたのである。

### 暮らしの様子

こうした中、人々の生活の様子はどのようなものであったのか。残念ながら集落に関する十分な情報がなく、その様子は解明されているとはいえない。前述のように当時の人々は狩猟による移動を繰り返しながら、一定の地域（集団領域＝テリトリー）で活動していたと考

えられている。そこで発掘された遺跡の石器の出土状態を詳細に分析することにより、拠点となる場所と一時的な狩猟ポイント（キャンプサイト）が想定される。つまり、拠点となる場所からは石器を製作した跡やその痕跡を示す遺物が大量に発見されるし、キャンプサイトからは単独に製品である石器のみが発見される場合が多い。拠点となる場所からは製品以外にも多くの石器が発見されることから、それらを分析することにより石器を製作する技術や、集団の行動の様子なども窺い知ることが出来る。また、キャンプサイトの分布からは集団のテリトリーを想定することが出来る。これらを組み合わせて考えると、想定される集団のテリトリーは遺跡の分布などから半径数十<sup>1)</sup>程度が考えられ、一つの集団の規模は一〇名程度、集団のあり方は単独、もしくは複数が存在したと考えられている。その際に住居が伴ったかどうかは分からないが、ヨーロッパなどの例や国内での数少ない事例（大阪府はさみ山遺跡、広島県西ガガ遺跡など）からすれば、簡単なテント掛け程度の住居を伴った可能性がある。

一方、狩猟によって得られた獲物は食料としてだけでなく、皮や角、骨なども生活道具として利用していた。石器の中には皮をなめしたと思われるもの（スクレイパー）や、皮を縫い合わせる穴をあけるもの（石錐）、角や骨に細工をしたもの（彫器）などがあり、その生活の一端を表している。また、主

要な食料としての肉は基本的には焼いて食べたと考えられるが、西日本などで発見される礫群などは、蒸し焼きを行うための施設ともいわれる。なお、前述のように西日本ではこの時期、冷温帯落葉広葉樹林が発達しており、理論的にはクルミ、クリ、ドングリなど縄文時代には食料としていた堅果類の捕食が可能であるが、それを加工するための石器が未発達なことなどから、その可能性を裏づけることが出来ない。

### 第三節 九州の旧石器時代遺跡

#### 概観

九州の旧石器時代遺跡の調査は佐賀県の唐津地域を嚆矢として比較的早い段階から開始され、一九六〇年代には大分県の早水台遺跡や丹生遺跡が前期旧石器時代論争の中心となるなど注目されてきた。特に旧石器時代の主要な石材である黒曜石（佐賀県腰岳など）や安山岩（佐賀県多久など）、流紋岩（大分県祖母・傾山系）が豊富に供給されることから、現在まで多くの遺跡が調査され、さまざまな分野からの研究がなされている。しかし、関東地方のように編年のひとつの尺度となる火山灰の発達した地域が限られることや、重層的に生活の痕跡が確認できる遺跡が少ないなど、決してフィールドとしては恵まれているわけではない。

とはいえ後期旧石器時代に見られるように各地の特徴的な石

材を用いた遺跡の分布は、その地域性や集団のテリトリー（行動領域）といった遺跡の構造論を論じるにはかえって好都合であり、阿蘇山や始良カルデラなどを供給源とする広域テフラ（火山灰）の存在は、石器の編年に一つの時間的な基準を与え、という意味で重要である。

こうした観点から、過去に複数の研究者によりその変遷が論じられてきたが、ここでは吉留秀敏の論考（吉留二〇〇一、二〇〇四）をもとに変遷の概要について紹介しておきたい。まず、九州地方では主要な石材の産地が各地で確認されており、そのエリアに符合するように遺跡の集中が見られる。石器の製作に際してはそれに適した石材が必要で、たとえば同じ金属の素材であっても、鉄は重くて飛行機など軽さが求められる製品には適さないし、アルミは強度の問題でタンカーなどの製造には向かない。石器についても同様で、使用する石材は規則的に割ることができ、その割口が鋭いことや細かな加工ができる岩質といった条件がある。こうした条件に合うものとしては黒曜石（佐賀県腰岳、長崎県針尾島など）、安山岩（佐賀県鬼ノ鼻岳など）、流紋岩（大分県大野川中流域、宮崎県五ヶ瀬川流域など）、チャート、珪質頁岩などが知られる。したがって、こうした石器製作に適した石材が産出する地域に遺跡の集中が認められ、九州全域で一六地域を抽出することが出来る。これらはその集中範囲が径五〇〇程度であり、前述の集団のテリトリー（行動